

【ミサを生きる】(2)

(参照「ミサの鑑賞—感謝の祭儀をささげるために—」吉池好高 オリエンズ宗教研究所)

※イエスの遺言

ミサは大きく分けて二つの部分から成り立っています。

最初の開祭の部分に続いて聖書の朗読が行われます。聖書朗読の後、それに基づいた司祭の説教があり、その後、全員で信仰宣言を唱え、共同祈願をささげます。ここまでがミサの第一部です。

続いて、パンとぶどう酒が奉納され、司祭がイエスの最後の晩餐のことばを中心とする奉献文と呼ばれる祈りを唱えます。それに続いて、参加者たちは主の祈りを唱えた後、聖体を拝領し、感謝の祈りをささげ、司祭の祝福を受けてミサを締めくくります。

この第二の部分は、イエス・キリストが最後の晩餐のときに行われたことを儀式的に現在化しているのです。このようなミサの基本構造は常に一定していて、日曜日ごとにカトリック信者はこの一定のミサに参加しているのです。

なぜそのようにしているかは、ミサの中心部分で司祭によって唱えられるイエス・キリストの最後の晩餐のことばにその根拠を見出すことができます。そこでは、次のようなイエスのことばが響きます。「これをわたしの記念として行いなさい」(奉献文、ルカ 22・19、一コリント 11・24～25 参照)

私たちの参加するミサはカトリック教会の伝統の中で、さまざまな変遷を経て現在の形を取るようになったのですが、この伝統を生み出し、今日まで存続させてきたのは、突き詰めれば、このイエス・キリストのことばです。イエスがそう望まれ、ご自分の死を目前にして弟子たちにそう託されたがゆえに、弟子たちと同じようにイエスを信じ、彼について行こうとする、その後の教会の信者たちは、このイエスのことばを自分たちに対するイエスの愛の遺言として受け止め、それを大切に守り続けているのです。

※人間イエスの願い

イエスはなぜ、あのような遺言を残されたのでしょうか。それがイエスの最後の望みであったからに違いありません。それは、愛する弟子たちの心の中にとどまり続けることを願う、人間イエスの、まさに人間的な願いを示しています。自分の死後も、自分が生きたあかしをこの世にとどめることを願う思いは、人間である者のまさに人間的な願いではないでしょうか。この切ないまでの願いを、私たちは何に託すことができるでしょうか。

自分の生涯において、自分を最もよく理解し、自分と夢を共有し、苦楽をともにしてくれた者たちを
いてほかに見出すことはできません。家庭をもつことのなかったイエスにとって、そのような人々とは、
自分と最後まで歩みをともにしてくれた弟子たち以外にはいません。弟子たちはそのような存在であっ
たに違いないのです。